

高麗知訥禪師の定慧結社と松広清規

卓 萬 植

知訥禪師（一一五八—一二一〇）は定慧結社の為にその一生の力を尽したのであり、定慧結社を円満に成就させる為に松広清規（誠初心学人文）を著わして定慧社（修禪社）に雲集する大衆の日常生活の清規に定めた。禪師の定慧結社の大願は何の様なものであるか。また定慧結社と松広清規は何の様な関係があるか。また松広清規である『誠初心学人文』は何の様な禅院清規であらうかを考察して見たい。

高麗中葉以来政治の紊乱と民心の弛緩に因って寺院は世俗の逃避場でありながら、また政争の策源地になり、また僧侶の綱紀も弛弛して転落と俗化の一路を歩んでいった。仏教本来の普利群生の菩薩道を忘却し、宮廷の利用仏教に落ちて、唯息災求福の祈禱に墮落し、また国庫と民生を顧みず寺院の建造修補は度を過ぎた。このような歴史的環境に生まれた禪師は当時僧侶の所行を見て次のように説いている。

知訥 自妙年 投身祖域 遍參禪肆 詳其仏祖垂慈為物之門 要令我輩 休息諸縁 虚心冥契 不外馳求……………然返觀我輩

朝暮所行之迹 則憑依仏法 裝飾我人 区区於利養之途 汨没於風塵之際 道德未修衣食斯費 雖復出家 何徳之有 噫 夫欲出離三界 而未有絶塵之行 徒為男子之身 而無丈夫之志 上乖弘道 下闕利生 中負四恩 誠以為耻 知訥 以是長歎 其來久矣。

と、このように僧侶達が仏法に憑藉して威儀だけ虚飾して世俗的利養の道に走り、政治的風塵に汨没して修行せざる所の行を見た禪師は妙年よりいつも歎息をしながら定慧結社の運動をしなければならぬと奮発を起したのである。禪師は二五歳の時、上都（開京）普濟寺談禪法会に於て同学十余人と共に約束して曰く

罷会后 当捨名利 陰遁山林 結為同社 常以習定均慧為務 礼仏転経 以至於執勞運力 各隨所任 而經營之 随縁養性 放曠平生 遠追達士真人之高行則豈不快哉。

と、相い相談して盟文を作成してかたく約束したのである。以上のように当時病弊を見て定慧結社の発願を立てた。禪師は二十五歳に僧科に合格したが、同志道伴と共に定慧結社を

結ぼうとした。然に選仏場の得失の因縁に因んで同志は四方に流離してしまつたのである。その後禪師の三十三歳の時、平生の所願たる定慧結社を八公山居祖寺で創設したのである。これが韓国曹溪宗の最初源流である。韓国仏教界では、曹溪宗源流についてさまざまな学説があるが、それはみな文献的証拠がたりないものである。定慧結社創設後、八年間、この公山居祖寺で結社安居する中に四方より緇白が雲集し、人は多く道場は狭くてここでは大叢林を開くことが出来ないことを思いだして弟子守愚を遣わして結社安禪の道場をさらに求めさせたのである。守愚は偶然に松広山吉祥寺に入り、道侶たる天真・郭照兩人と同心戮力して寺を重創したのである。禪師は四十二歳(一一二〇)の時、最後の大衆接化の活やくに入る為、定慧結社を公山居祖寺より全南順天松広山吉祥寺に移し、熙宗元年(一一二五)十月一日、寺の竣工と共に朝旨を受けて、一二〇日間慶讚法会を設け開堂説禪して、いよいよ本拠が落成したのである。熙宗はこれを聞いて嘉賞し、禪師の請に依つて山名を改めて曹溪山とし、社名を修禪社と命名し、御筆で題額して褒賞したのである。(定慧社を修禪社と改めたのは隣近に同名の定慧寺があつて名称が混同するから朝旨を受けて修禪社と名付けたのである。)これが即ち曹溪山修禪社創設を国家的公認を受けたことになるのである。

このように禪師は定慧結社の本拠を創設すると共に大衆生

活の規範を設ける為、『誠初心学人文』を著わしたのである。これが即ち松広清規といわれるものである。『誠初心学人文』は、早く中国に流入されて、『真心直説』と合本されて北蔵(明蔵)の數字・徑山蔵就字・竜蔵芸字・頻伽蔵騰字に収録されている。最近には大正新修蔵経四八巻にも収録されている。高麗時代の板本は現存するものがない。万曆王寅(一六〇二)明の徑山寂照庵刊の高麗国普照禪師『修心訣』・『真心直説』と合本された『誠初心学人文』が古いものである。国内本としては万曆七年(一五七九)神興寺刻本は、元晁撰『発心修行章』と野雲比丘の撰『自警文』と合本されているものである。その後の板本は前の三本をあわせて『初発心自警文』と名を改めて出版されたものがいろいろあるのである。この『誠初心学人文』は皆九〇八字の短篇であり、その内容は僧堂生活の清規である。これが韓国禪院清規としてはその嚆矢になる。本書は禪師の四十八歳の時修禪社竣工と共に著わして修禪社清規に利用されたことは言うまでもないが、李太祖六年(一一三九七)に尚聰禪師が曹溪宗本寺に新設された興天寺第一世住持に莅臨して王旨を受けて全国所属寺刹の清規として施行されたのである。現在韓国仏教の出家教団では出家入山の最初に必ずこの『誠初心学人文』を学ぶのである。

この清規を禪師はどうして修禪社竣工と共に著わしたので

あろうか。禪師の三十三歳の時、公山居祖寺にて定慧社創設以後、約十年間は何の様な清規を以て大衆を接化したのであろうか。資料の不足でその時の日用清規は窺うことは出来ないが、修禪社竣工と共に清規を著わしたのを見ると、公山定慧社の時は清規がなく大衆統率になやんでいたことが窺ってくる。もちろん戒律や禪苑清規に依って大衆を統率したのであろうと考えられるが、一定した清規がなく大衆統率に心配していたことがあつたから松広山修禪社には寺の竣工と共に清規を著わして最初より大衆の日常生活を清規に依って統率しようということが考えられるのである。

此の『誠初心学人文』を普通三段に分けて、一、「夫初心之人より影響相從」までは沙弥僧の警誡であり、二、「居衆寮より豈為智慧人也」までは僧堂大衆の警誡であり、三、住社堂以下終尾迄を社堂僧の警誡であると言^①うが、その内容を詳細に見ればこのように沙弥僧・僧堂大衆・社堂僧を部分的に警誡したのではなく、初心入社の大衆を一緒に警誡したものであると考えられる。本書の始めに

夫初心之人 須遠離惡友 親近賢聖 受五戒十戒等 善知持犯開遮。

とある。発心して入山修行する人が悪友を遠離して賢聖を親近するのは悪いことを離れて良いことを為す為であるし、五戒十戒等を受けて持犯開遮すると言^②うのは沙弥僧だけ誠戒し

たのではなく大衆に関する警誡である。五戒とは一般信者の戒であり、十戒は沙弥の戒である。五戒十戒等と言^③うこの「等」の意味は菩薩戒・比丘戒やいろいろの戒が含まるのである。このような全般的な戒律を受けた人達がその戒律を受けて持犯開遮を善くしなければならぬということである。

この持犯開遮は普通の沙弥行者は不可能なものである。少なくとも出家して道の体験を得なければ持犯開遮は出来ないことであろうと考えられる。これを沙弥僧だけの誠戒であると言^④つたら妥当であろうか。知訥禪師の語録を通じて見れば禪師が言う初心の意味は随分広い意味が内包されている。初心とは初発信心を指すことであるが、初め発心して信がまた得られない人とか、また信心が得られた人等を皆指すのである。禪師の仏法は信の仏法ともいうべき信成就を大切にしているものである。『華嚴論』に「発心畢竟二不別、如是二心前心難」と説いて、初め発心を一番大切にするのである。華嚴の「初発信心 便成正覺」の思想は大乗仏教の思想であるが、特に李通玄と知訥禪師は初め発心を重要とし、衆生本来成仏を主張するのである。心は初心とか畢竟成仏後の心が不二であるが、不二たる中にも信心を発するその出发点が最も重要なことである。禪師は『円頓成仏論』に於て菩提心を発する時、既に自分の心が諸仏果徳と契合して分毫も謬ることがないことを返照しなければ、信はまた得られないのであると強

調している^⑤。禪師は発心して信が得られた(悟)人も修行をしなければならぬといつても戒を守るべきだと強調している。この為に五戒十戒等を受けて修行する清規が必然的に必要であると考えられて来る。

この『誠初心学人文』を分段に分けて見ると一、発心。二、出家。三、受戒。四、持犯開遮。五、依仏。六、參倍清衆。七、遠離財色。八、不入他房。九、不探他事。十、洗滌內衣。十一、盥漱。十二、行益次。十三、經行次。十四、言談次。十五、外出。十六、看病。十七、接賓。十八、逢尊長。十九、辨道具。二十、齋食。二十一、焚修。二十二、居衆寮。二十三、對客言談。二十四、見聞雜事。二十五、与俗交通。二十六、住社堂。二十七、聞法。二十八、漸修業障の二十八段に分けられるのである。

以上の如く初め発心より成仏まで大衆生活の日用清規を短篇に纏めたのであるが、これは清規の基本たるものであり、細則が詳しく述べられていないのである。その細則はなにを以て使用したのであろうか。禪師の『誠初心学人文』と禪苑清規を比較して見れば禪苑清規の本文を引用した処が多いのである。これを見ると修禪社の大衆儀軌細則は禪苑清規の細則に依ったのではないかと考えられて来る。次に禪師の『誠初心学人文』と『禪苑清規』を比較して見ると、その内容から見て禪師の『誠初心学人文』は禪苑清規を底本としたことは

言うまでもないが、然し、その時代に流布している重雕補註本と重添足本とはその文章がかなり似ているから何の本を底本としたのが問題である。板刊年代順に従って見れば、重雕補註本は南宋嘉泰二年(一一二〇)に虞翔によって再刻されたものであり、禪師の『誠初心学人文』は一一二〇五に發表したものであるから、年代的には三年後ちであるが、三年の間に禪師が重雕補註本を宋より高麗に輸入して底本としたということはあまり時間がみちかいのである。恐らく禪師は高麗に流布していた聖宋政和元年(一一一一)上元日刊行の覆宋槧本『重添足本禪苑清規』を見てあったことはたしかであろう。そうすると日本故大屋徳城氏の所蔵本(現在小坂機融氏所蔵)重添足本より古い本であることが知られる。大屋徳城氏の本は同一の重添足本といえとも高麗の分司大蔵都監で甲寅歳(一一二五)の重雕本であるから、禪師の『誠初心学人文』著作後四十九年に当るからである。

以上の如く禪師は妙年より定慧結社の志を立てて三十三歳に定慧結社を創設し、その結社の大事を円満に成就させる為にまた場所を移して松広清規たる『誠初心学人文』を著わして曹溪家風の清規を樹立したのである。(註略)

(東国大学校講師)